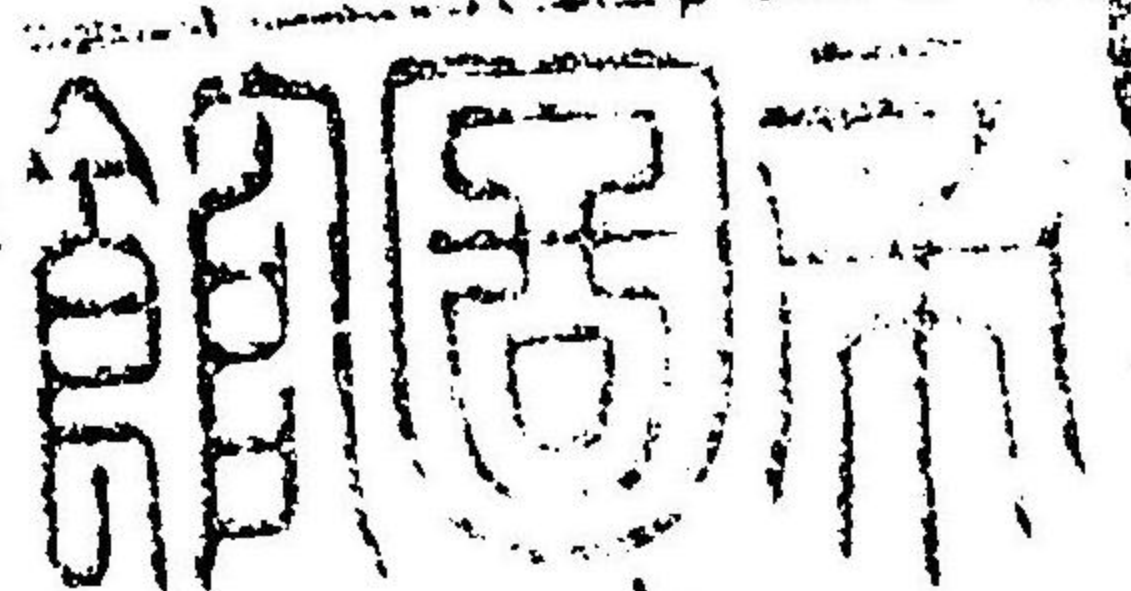



坐禪之  
捷徑

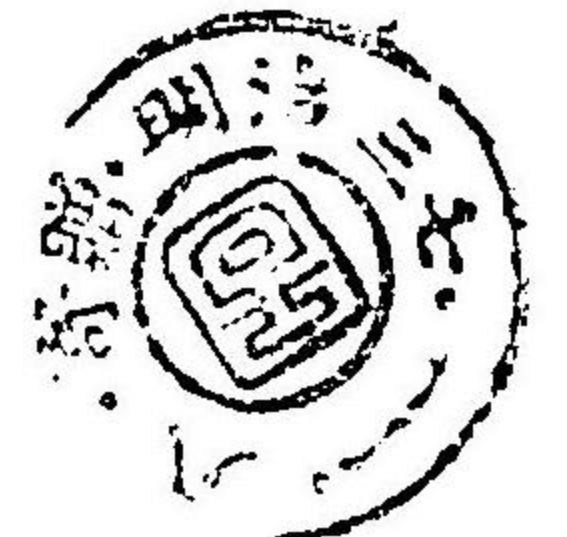
圓覺寺管長  
釋宗演禪師序  
忘路庵  
川尻寶岑居士著

東京  
すみやま書店發行

94-233

  
  
 殺人刀活人劍。乃上古  
 之規。亦今時之樞要。  
 若論殺也不傷一毫。若  
 論活也喪身失命。所以  
 道向上一路千聖不傳  
 碧巖十二則之垂示

著者  
 寄贈本



坐禪之捷徑序

居士川尻寶岑翁ハ予カ方外ノ益友ナリ居士弱冠ニシテ箇ノ禪病ニ罹リ芝村ノ願翁禪師ニ就テ點藥ヲ求ム後チ先師蒼龍老漢ニ見エテ痛處ニ一針ヲ喫シテヨリ枯骨再肉爾來京鎌ノ間ヲ往來スルコト實ニ十數年迄寒溽暑ト雖未曾テ廢セス遂ニ無始以來ノ膏肓ノ病ヲ療得セリ是ヨリ又當時ノ禪豪越溪滴水獨園等ノ諸老ニ親炙シテ能ク其藥籠中ノ事ヲ諸ンズ予明治十一

年始テ居士ト東台山下ニ相見シヨリ此ニ二十  
 八年道交不替殆ト一日ノ如シ居士近比同好ノ  
 需ニ應ジテ其藥功表顯ノ婆說ヲ述シテ題シテ  
 坐禪ノ捷徑ト云フ其言極メテ平易而モ其旨至  
 テ深遠ナリ人アリ若シ信得シテ服膺セバ八萬  
 四千ノ心病立地ニ快愈スルコト猶郢人ノ斧ヲ  
 揮テ風ヲ成スガ如クナラン世人多クハ文學家、  
 雄辯家、心學家トシテノ居士ヲ知ル但其一箇無  
 病閑人忘路庵主トシテノ居士ヲ知ルモノ予ヲ

措テ誰カアル乃チ一言ヲ記シテ家醜ヲ外ニ揚  
 クト云フ

鹿山樵夫洪嶽識

坐禪之捷徑

緒言

近來禪といふことが一種の流行物のやうに成て學者無學者を問はず男女考幼を撰ばず官員書生商人職人誰彼なしに多く坐禪をする人が出來てきたのはまことに有難いことで悦ばしく思ふので有る而して其坐禪する人等の中で素志を遂る者は至つて尠く中途で止めて仕舞人が多い折角師家に値遇しても一則の公案も透らぬうちに厭倦して止めて仕舞ふのが十中の

八九で有る一旦志しを發しながら途中で止る氣にな  
 るといふは何から然うなるかと尋て見ると凡そ禪門  
 に入る人の其志す所は悟といふものに在るのじや而  
 かもその悟といふものは智慧分別文字上では往ぬと  
 いふことを知らぬのを只考へて當てるものじやと心  
 得て頻りに考へて計り居るから考へてもく追ツつ  
 かぬおツつかぬから止めて仕舞ふ畢竟最初の思ひ込  
 が違つて居るからのこと

上もなき道をもとむる心には

命も身をも惜しむものは

淨氣ではなびかぬ彌陀のふり袖は

命ぐるみに打込んで見よ

生死の大海をのりこえる仕事じやからさう容易に往  
 るものぞは無いは是が考へて當てられるものなら昔し  
 の知識等が十年二十年坐禪に骨を折られたのは智慧  
 の無い人等と言はねばならぬのが決して其様な理の  
 ものでは無いよく深く信を發して志しを固くし  
 て身も命も打込んでかゝらねば往ぬ筈のもので有る  
 ので逆もやるなら本氣に成てかゝるがよい  
 又本氣でかゝつて骨折て居て往ぬ人が有る是はヤツ

ぱり骨折が分別の方へ曲り込で居るのでもと考へて  
 ゆけぬものを考へて居るのじやから骨ばかり折れて  
 さきゆきがしないのまことに氣のとくなもので有る  
 此側の學者等は皆信も有り志も有るので只其方向を  
 誤つて居るばかり出る所へ出られぬのじや我等も  
 もと此病の爲めには長く苦しんだもので有るから同  
 じ病ひに悩んで居る人々の方針の便りにもと思ふ所  
 から此捷徑のお話しを思ひついたので修行も届かぬ  
 我等では有るけれども此捷徑ばかりは自ら踏渉して  
 覺えの有ること決して嘘は言はぬ正眞の話じや此言

ふ通りを正直に正眞に骨を折さへすれば徒な工夫を  
 費やさず一日も早く悟れることはきつと保證間違ひ  
 無いことじや  
 扱又此悟りといふことは一種特別なものが有て悟り  
 を開けば別段變つたものにも成るやうに思つて居  
 る人も有るが決してさういふわけのものでは無い悟  
 つたからというて身から光明も放さず肉色が金色に  
 もならず何にも變つたことは無い實は悟つて見ると  
 悟りらしいものは何にも有はせぬのじや  
 悟とは悟らぬ前のさとりにて悟りて見ればさとり

けもなし  
 法身國師の偈に心法了却無一物本是真壁平四郎  
 ヤツバリ本の凡夫にかはりはない夫では一向つまら  
 ぬもの此つまらぬものが悟りじや悟りに悟りが有る  
 のでは無いサレドモ悟らぬ前の人には慥かに有るの  
 で其所からして悟といふ名が立て居るのじや名目が  
 無れば法の話しを爲やうがないソコデ據なく名目が  
 立つて来る今此捷徑のお話しをするに就ても名目が  
 無れば話しが出来ぬ夫故此悟といふ名目を以て始終  
 貫いて話すので有眼の人には暫く許して貰ふので有

又今ひとつ断つて置くことは是から話しをする速路  
 といふのはすべて在家の人の爲めにのみ話すので有  
 て僧分の人の修行には一切關係せぬので有る  
 古人の歌に

星ひとつ見つけし夜半の嬉しさは

月にもまさるころこそすれ

是が最初省發した時のころもちで我等も此嬉しさ  
 は覺えが有るのじやが其後何ひとつ得た事も無く徒  
 らに月日を重ねて仕舞たので禪宗といふことさへ未



だに正眞には理も解らず修行といふもお恥かしい未  
 熟なもので有るなれども只初機の人の修行の便宜を  
 思ふ計りに我身を顧ずに話すので有るから其つもり  
 で聞て貰うのじや  
 徳も無く愚なる身の及びなき  
 道こそ道のしるべするなれ

明治三十七年初秋日

忘路庵主述

# 坐禪之捷徑

## 坐禪の目的

人を禪門に入て坐禪をするに就ては第一に先へ立つ  
 ものは此目的といふものいつたい坐禪といふものは  
 自己の一心を明らかに修行で有れば向ふへ目的を立  
 るといふのは間違つた事で有るのじやが大概は世間  
 學の修行ぶりと同じ様に思つて居るのじやからいつ  
 れ何とか目的を立てかゝるので有る世間の學問で見

川尻寶岑述

れば夫々の學科が有てその科目だけのものを習得して卒業の上では何事業に就くといふことが豫じめ目的が立て得られる又此目的が學問獎勵の先導者といふものでさう無ければならぬので有る其とは違つて坐禪の修行はさきの見えぬ仕事で悟つてどんなものになるのじややらまだ夢にも見た事のないさきの見えぬ悟りを豫め想像して目的を立てるといふのは無理なことであるけれども何とか目的が無ければ進路の便りが無いやうに思ふのでソコ種々な目的をつけてかゝるのじや

まづ悟りが開ければすぐに聖人神佛のやうな境界が得られて是迄知らなんだ事が何もかも一時に解つて豪いものになれるやうに目的をつけて見て居る人が有る是らの人は悟りは我が分に非ずと見て目的の爲めに腰をぬかして自ら萎縮して寄りつき得ぬので有る

又聖人神佛と迄には思はずして悟を開けば何でも解らぬ事は無くなるので天地間の道理に悉く通達するものと認て物理学と混じて見て居る人も有る是らの人は豫め天地の道理を知つて置ねば悟りは得られぬ

と思つて那の道理此道理と頭腦を痛め胸を惱めて五年も十年もまだ解らぬまだ知れぬまだ坐禪にはかゝれぬと獨り苦しんで一生を過して仕舞のじや或はまたやりかけて出来ぬ時には外聞がわるいといふわづかな名聞心の爲めに壓へられて寄りつき得ぬ人も有る是らはたゞ六ヶしいものといふ目的に壓止されて居るので有る  
以上は私の想像に出る我見といふもので畢竟坐禪を惡蔑する卑見ではないのじやが只目的の見當違ひ俗にいふ盲人の垣のぞきといふのを生涯門の中へ遣入

り得ない人等じや

或はまた悟りなごといふことは昔の上根の人のすることとで末世下根の我々が到底思ひ絶つべきこととで公案工夫するなどは却て妄念を増ので有てわざ／＼心を汚すといふもの坐禪は妄念を鎮めて空寂に入ることで空に成た所が即ち佛じや日用の上は妄念の凡夫じやから罪を造るのは仕方が無い坐禪の時だけ空に成て佛に近づきさうして折々佛教祖録の講義でも聞て少しづつも法理を覺えてゆくのが今時凡夫の最上の修行じやときめて居るのは畢竟空になるのが目

的じや。こんな所へかゝみ込んだら何年立ても正眞の悟りを得る事は出来ぬ古人も湛々、黒暗、深坑、實可怖、畏、又は黒山下鬼家活計などと大きな眼玉をむき出してこごとを言はれて有るので有る  
 或はまた線香立て坐禪させるのは佛の方便で初心の者を靠て置くのじや六祖は禪は心に在り豈坐に在らんやといはれて有て日用萬事が活禪法で寝るも坐禪起るも坐禪することなす事皆坐禪とおれがくの我見妄想で腹の中は満たされて居て自分免許の獨りすまし四苦八苦の中にかゝみ込んで苦しんで居るのは

恰と一とつの握り飯を口から喰て腹を通してつまり雪隠へ入れるのじやから口から喰ふだけむだな手間じやと喰はずにすぐに雪隠へ抛り込むやうなもので腹の足しには些とも成らぬ又近來學者社會では一種の學問と見なし物理研究的と同視して禪宗研究といふ目的で坐禪に入る人が大分有る是等の人は坐禪の蒲團の上を公案考へ所と思つて居るので形ちは坐禪らしい姿に見えるが腹の中では無性に妄想を繰出して考へ出しては入室し分別しては參禪して坐禪辨道と思つて居る大きな見當違ひといふもので縦ひまぐ

れ當りに言ひあてた所が想像が妄想を認て居るのじやから到底悟る事は出来ぬのじや  
 或はまた我こそ悟りを開いて居るぞと高上めかして  
 社會に衒ひ他人に誇り尊ふとまれてえらい者といは  
 れたいの目的で妄想坐禪して居るのもある  
 又は一則の公案を答へあてさへすればそれが悟りじ  
 やと心得て公案ばかりつつ付て妄想かわいて居るも  
 ある此外生死脱得たとか心源識得じやとか本來無一  
 物の眞如法性のと十人十種の目的が有うといふもの  
 じやが是等のことは開けさへすれば自から得る所の

もので有て坐禪中の目的にして擔つて居る筈のもの  
 では無いすべて向ふへあてめをつけて睥睨で居ると  
 その目的が心の蓋に成ていつ迄やつても開けはせぬ  
 いつたい志といふものは氣の帥なりといふて一度立  
 たら始終貫いて無くなるものでは無いから決して始  
 終思つて居るには及ばぬのじやそれをわざ／＼念々  
 の間だに持出して目的として睥睨で居るから本心の  
 蓋に成て修行の進路を閉されて仕舞ので有る  
 然らば眞正の目的はどこへ立るじやといふと目的を  
 立ないのが眞の目的で少しも向ふへ目的をつけず自

己に取てかへして公案三昧に入る是が目的なしの眞の目的といふもの此外に少しでも向ふへ目的が有つたらみんな邪魔ものじや  
坐禪工夫といふ事は世間の學術とはソクツリ變つたもので有るといふ事をよく承知して蒲團の上へすわり込だら少しも外へ心を走せず一則の公案を提撕してわきひら見ずに一機に進んで公案三昧に入て仕舞のじや是を正念工夫不斷相續といふので有る

六祖大師云外離相爲禪内不亂爲定又曰外於一切善惡境界心念不起名爲坐内見自性不動名爲禪

禪

坐禪の方向

凡そ坐禪をする人はいづれも心の方向といふものか有るので有る此方向といふものはまことに大事なもので此方向が志す方へ眞直に向て居れば其志す方へ往かれるのじやがもし方向が斜に向て居ると斜に斜にと進んでゆくからいつ迄も志す方へゆく事が出来ぬ譬へば東へ志すものが西へむいてゆくやうなものいつ迄も東の方へ出る事は出来ぬ此方針の向け方に

種々ある  
 まづ坐禪といふものは精神を静める爲めにするもの  
 じやといふ所へ心のむいて居る人が有る最も儒道に  
 も静坐といふ事が有て精神を治める爲めにするので  
 有るから精神を治めるといふ事はわるい事では無い  
 けれども禪門の坐禪といふものはそれしきに限るも  
 のでは無いので有る只精神を鎮めるの一方向きに成  
 て居ると坐禪の時僅かに妄念が治まるとモウ夫がよ  
 いのじやと思ふ此思ふものが妄識じやからしていつ  
 迄立ても此妄識を破る事は出来ぬ只折々妄念の静か

になるだけの事じや恰と終日借金取りに責られて居  
 るものが夜に成て暫時かけとりがとぎれたやうなも  
 の其時だけは樂に成たやうじやが又翌日になると責  
 て來る其ときれた間だチヨイ／＼息をつくのと同じ  
 事で一生涯正眞の樂を得る事は出来ぬ  
 又は空に成るのが悟りじやと思つて空にならう／＼  
 と方針を向けて居る者が有る最も佛の經文の中にも  
 空といふ字は方々に出て居るので有るが佛經の空に  
 は大いに子細の有る事じや譬へば目の先の虚空がお  
 れは虚空じやなどとは決して思つては居らぬ此思つ

て居らぬのが眞の空で空が空を知つて居るやうな空がどこにも有るものでは無い人間の佛性も亦其通りおれは佛性じやの眞空じやのと決して思つては居らぬ此思つて居らぬのが生れつきの本體じや此本體からして一切の智恵分別も發明するので日用萬事自由自在が足りてゆくのだじや然かもその本を抛り出して置いて妄識の分別せわざく空といふ一物を拵へてその偽空を白眼つけて其上にまた空にならうくと心起してゆくのだじやからますく妄識は旺んに成て百年立ても眞に入る期は來りはせぬよしまた空に成

た所で何にもならぬ催眠術をかけられたやうなものじや術をもとせばもとのもくあみ何にも得る所は無いのぞ有るもし又空に成たのが悟りであるなら人間は毎ばん一へんは眠りに就て空に入るから毎朝一へんづつ悟りが開けさうなもの所が決してさうはゆかぬ悟りは空なものぞないからして空に成つたから悟るといふわけには到底ゆきはせぬ  
佛にもなりかたまつて入らぬもの石佛らを見るにつけても

又其次は師家から授つた公案を考へてあてるものど



やと方針を向けて居るのじや是はまた身軀は坐禪して居るやうに見えても腹の中は妄念計りで此れか彼れかとまごついて全身妄想のかたまりに成て居る是を日用のひま潰し坐禪といふ妄想分別であたるものなら火鉢の側で煙草を吸ながらでも出来る事坐禪するの徒なもので雪隠を分別所といふから雪隠で考へても事はすむわけの有るが決して考へ分別でゆくものでは無いので有る

又或は世の繁雑を厭うて方針を佛法へむけて坐禪の門に入るのも有る是は自心の厭世主義を佛法に依て逐るといふもので坐禪の本志とは言はれぬのじや何故といふに佛法といふものは廣いもので決定して厭世主義のものでは無いので有る

維摩經諸煩惱是道場知如實故とあり六祖大師云佛法在世間不離世間覺離世覓菩提恰如求兔角というて有りさうかと思ふと法華三界無安猶如火宅と説き選擇集には一切衆生根生不同有上中下隨其根生佛皆勸專念三無量壽名とある是佛法の廣大な所で官員に在ては勤仕が佛法商人に在ては商法が佛法百姓に在ては農業が佛法沙門に在ては僧行が佛法此他

天地間有るとあらゆる事物佛法ならざるものは無いので別に佛法というてかたまつたものが有るのでは無いされば厭世を以て佛法の主義とする理は決定して有はせぬ今厭世に就て一例を擧て見れば男子では西行法師蓮生坊の類婦人では了然尼虎御前杯の類で或は一事業を爲し了つて佛門に入り或は主親夫の菩提の爲めに遁世し或は其身の本分を全うするに就て世を辭し或は度生の慈心から脱俗して法に入るもあり或は自ら世の無常を感じ事業を轉じて桑門に入り度生に力を盡すもある或は惡事惡業の者一心懺悔し

て消罪の爲めに遁世するなどといふ類でいづれも夫々の理由が有て然るので楠正成公は大悟徹底の御方で一生忠君の本分を盡されたのは即ち楠公の佛法北條時宗は元使の首を切て宸襟を安んじ奉つたのは時宗の佛法ぞされば佛法中に厭世といふ主義は決して含まれては居らぬので有るたま〜厭世のやうに見ゆるのは迷ひの世界を厭つて悟りの世界へ出よといふ事で世界はヤツパリ一つ世界じや然るを何の理由もなく世を恨み身をかこち又は慢心

なごから思ひたつ厭世心は皆我身の執着から發るの  
 で縦ひ一人山林に入て世を避るとも此執着に障礙せ  
 られて坐禪の本色に入る事は所詮出來ぬので有る以  
 上舉て來た所のものは坐禪するに就て其方向を誤つ  
 て居るの大畧であるまだ此外にいくらも有るが大凡  
 まづこんなものじや兎に角方向が間違つて居ると折  
 角坐禪に従事しても其功驗を見る事のならぬ計りて  
 なく却て地獄の種蒔にもなる事て有るからして其方  
 向を眞直にして般若到彼岸の實行を成就するのが肝  
 腎要じやされば正眞の方向はどうむけるのが直道か

といへば前にいうて來た間違ひをすべて取除けて仕  
 舞へば夫が眞の方向といふもの眞の方針は公案ひと  
 つで此公案計りに方針を向けて公案になり切て仕舞  
 のが眞の方向じや尙此事は後の用心の所で話すから  
 して夫と是と照合せて見ると自からよくわかるので  
 有る

坐禪の仕方

近來俗家の人で坐禪をする者が大分出來てきたが多  
 くは蒲團の上を公案考へ所と誤解してなんでも考へ

てあてさへすればよい事に思つて居るので夫故に或は結跏或は半跏或は着坐或は立膝などして皆腕組をして俯俛て考へて計り居て坐禪の仕方などの事は更に意とせずまるで知らずにやつて居る者も有るいつたい坐禪といふ事は考へ事では無い一則の公案を提撕して自己を窮明する場所であるのじや夫故坐禪の方法を知ると知らぬとは工夫上大いに遅速損徳の關係の有る事じや依て今聊か坐禪のしかたをお話ししやうと思ふのであるまづ蒲團の上へ坐つたら兩足をズツト出して右の手で右の足を取て左の股の上へち

かにのせ夫から左りの手で左の足を取て着りの股の上へちかにのせるソコテ兩脚がくめる是を結跏といふ此時には足へちかに手をかけてはいけね着物の上から扱ふのじやそれはいふと足は下に在て泥の中も歩行もの手は上に在て神佛をも拜むもの故ちかに手をかけぬやうにするのじや夫から左右の手をあはに重ねて親指の腹と腹とを合せて臍の下の邊りへ緊りと押つける是は右の手を下にして左りの手を上にするのすべて右を行に取り左りを智恵に取る事で左りを以て右を壓へるやうにするのじやさうして眼を

大きく開かぬやう又閉ぬやうにして三尺よりさきを見ぬやうにするのじや是は三尺さきを見るといふ意味では無い單へに眼をキヨロつかせぬやうにするのぞ有て又眼を閉れば妄想がつよくなるゆる眼はあいて居るがよろしいのて口は結びきりにして舌を上願へあて、置て無聲で公案を拈じてゆくのじや夫から脊梁骨を直立ると云うて脊骨のガクリと折れて居らぬやうグツト真直に押立て下腹を少しつき出すやうにして鼻と臍と對し耳と肩と對すというて定木をあてれば真直になるやうにするので天慧のてつべんか

ら長い大きな釘をさし通したやうにからだを真直にかまへるのじや息は鼻から細く出入させて荒い息をせぬやうに又息に意をかけぬやう公案の方へ十分心を入れて息は自然に公案と共に出入するやうにしてゆくのじや息で煉る氣で居ると公案と息と二つになる少しも息に氣をかけずにたゞ公案に力を入れて下腹へ煉込で此公案を尻の穴をぶちぬき床板をぶちぬき大地をぶちぬいて地軸のどん底迄もぶちぬく心持でしつかりくと煉込のじやさうして息をむりに長くつめていきむのは甚だわるい息は自分の精いつば

いに適宜に出入させるのがよい息には力を入れぬやうに公案にしつかりと力を入れてゆく是が坐禪の仕方である

又數息觀というて公案なしで息を數へて居るやりかたも有るが是は公案工夫せぬ方のやりかたで一則の公案を工夫するものは前のやりかたで無ければいけないのじや

又經行といふ事をするので是は例へば一炷の線香を一座とすれば其内を一寸程のこして此一寸を經行するのじや經行とは立て場内をクル／＼歩行のて有る

此時はすべて公案と共に立ち居をするやうにして又手當胸というて兩手を重ねて胸へあて、歩行のてこれも亦右の手を下にして左りで右を押へるやうにするので有るさうして立つ時も坐する時もすべて公案のぬけぬやうす公案を拈じながら立居をするので又立時も坐する時も遅回つかぬやうにスツト立てスツキリ／＼とやらねばいけぬさうしてズツト立たなればすぐに左りの方へむいてあるき出して場内を端から端をめぐるのじや此あるき方は耳へ風の當るくらゐ早足がよい又一方には一息半歩というて極々靜かに

歩行せる方法も有るが是は早く歩行方がよいのじや  
線香一寸立きつたらまたもとの通り坐つて是で幾炷  
でも適宜につゞけるのじや是を禪堂で勤る時は直日  
といふ役の坊様が有て鐘をならして先導して呉るか  
ら萬事それに従つてゆけばよいので有て又獨りでや  
るときは前にいふた通りに心得て此順序でやるので  
有る  
又坐中に足の痛くなる事が有る是がなか／＼痛い  
で線香一炷たちきさらぬうちに堪られなくなつて來る  
其時は片足下ろして股の下へ入れて半跏にするので

此半跏も左りの足を上へあげて置くのが法で有るけ  
れども痛むときに暫時くみかへる時はどちらを上  
してもよい痛みが止んだらもとの通りにくめばよい  
のじや  
又少用にゆくのは徑行の時にゆく事で坐中には決し  
て立つ事はせぬやうにするの是は豫じめ心得て居て  
妄りに立ぬやうにするので有る扱又坐禪に動靜の二  
境が有る蒲團の上の坐禪は世務を離れて一室へ籠る  
事故是を靜中の修行といふ又今日朝から晩迄の日用  
の上を動中の修行といふ是は日用の境界の中で公案

を拈提するので有てまづ用事にかゝつた時は其用に成切て勤めナヨイト用向きの間合が出来た時はすぐ公案に取てかへして拈じるので例へば火鉢の側で煙草など吸て居る時は用向きの合間といふものさういふ時には妄想を繰出さずに向に公案を拈提して居るのじや是を動中の工夫といふ此動中で公案相續した力を靜中へ寫し靜中で公案三昧に入た力を動中へ寫し互ひに錯綜して進修する是を動靜の二境といふのじやされども動中には年來妄想の癖が附て居るか容易に公案になれないものソヨテ靜中に於て經行

といふ事をするので此經行中の公案が即ち動中の工夫といふもので言はば靜中に在て動中の下ならしをするので有る故に此經行は動靜二境の中に立て雙方を助ける媒になるもので有る中には經行は氣血の運動をつける爲めじやと思つて居る人も有るが運動の理は自然屬しては居るけれども運動が經行の本主意では無いので有るまづ是があらましの坐禪のしかたといふものじや是を知らずに只坐つて居ると工夫上大に損の有る事有るから夫故にまづ一ト通り此お話しを仕て置くので有る



坐禪の心得

坐禪辨道する人は常に心得て置かねばならぬ事が幾  
 個か有るので今差當り思ひ出しただけをお話する  
 のじや。  
 まづ最初師から公案を授る時には師家に向つて三拜  
 をして夫から少し坐をすゝんで公案を授つて仕舞つ  
 たら又三拜をして引下つて來るのじや其後工夫が付  
 て參禪をする時も最初に三拜をしてはじめにまづ自  
 身の公案を一へん述るのじや是は必ず忘れてはなら

ぬ夫から自身の見解を呈して師家の垂示を蒙つて夫  
 が濟んだらまた跡で三拜をして引下るので是は參禪  
 の度び毎に此通りするので有る中には高官のお人な  
 らば在ては三拜を爲にくゝ思ふお方も有うけれど是  
 は法じやから身分の貴賤に拘はらずせねばならぬわ  
 けのもので有る何故又此やうにするぞと言へば平常  
 は五分々々の人間で有るけれども師家が參禪を受る  
 時計りは即ち佛の代理で有るのじや其時に在ては師  
 家が其儘佛で有るからして佛に三拜する理になるの  
 で在る

又師資の約を結んだ以上は其師を信ずるといふ事が最も肝要じや修行の上に大に關係を持事であつて大事なことじや世間の學藝で見ると教員と生徒と朋友のやうに成て居ても夫でも學藝は傳へられるのであるが是は無形の心の修行で有るからして信といふもの、薄いときは到底傳へ得る事は出来ぬので有る信といつても口の先でお世辭を云ふたり形ちの上で異様に扱かふといふわけでは無い只心中に深く信じて疑はぬ事じや大骨折て見解をたて、大丈夫と思つて參禪しても師家の活眼でまだ届かぬと見れば許しは

せぬ此時師家を疑ふものが有ると決定して夫より先へ出る事は出来ぬこゝに於て信が入用に信ずるものが有れば師家の一言一句を眞實に聞て其通り正直にするからどこ迄も進む事が出来るもし心に疑ふものが有るとおれには十分わかつて居るのに師家が故と許して呉ぬのじやモウ許して貰はずとよいおれにはわかつたなどと自分免許の獨りすまして偽ものを握つてよい氣に成て居るといふのが智者學者の社會に多く有るのじやこゝに於て信心が薄いと師家のいふ通りに辛抱が出来ぬのじや

或はまた悪刺な師家の手にかゝる時はそれはく酷地目に逢ふので打れたり踏まれたり跳られたりする其時信といふもがの薄いと看々師家の方が無理じやと思ふ所が決して無理で無いのじや只その師家の胸腹を伺ふ事が出来ぬのじや黄門光圀公の示しに主親は無理なるものと思へと身に在ては無理のやうに思ふので有るソコを押へて示されたもの師弟の間も亦其通りで學者に在ては縦ひ師家が無理に見えても亦打れても踏まれてもあくまで心に信を置てソツクリ身軀をうち任せて命がけて骨を折るのじやさうさへ

してゆけば必ず正眞の所へつき當るので有る又師資の約を結んだ以上は其師家を心に深く尊ふとむのじや世間の學藝でさへ天地國王父母師とならべて上四恩の中へかぞへられて有る況んや是は天地同根神佛同體の位地に迄教導して貰ふ本師じやから彌々尊とまねばならぬわけのもの是もまた形の上で恭敬を盡す計りが旨趣では無い内心に深く尊ふとむので有るかういふ道理のもので有るからして心に信じない師家ならば始めから師弟の約を結ばぬ事じや古人も三

年學ばずして師を撰べというて有る師を信ずると信  
ぜぬとは悟りの開けると開けぬとの關係で有て輕忽  
な事で無いので有る  
夫から又參禪のとき自己の見解が届かないで師家に  
いけぬといはれるとそんなら是ではどふでござりま  
すとすぐに其場でやり直しをするのが有る商人が客  
に代品物を見せて夫がお氣に入りませずは此方らの  
品ではいかさまといふのはわけが違ふ參禪のや  
り直しは最も禮を失した事て有る是が覺えことなら  
其場でいくたびやり直しても差支はないが是は覺え

ことでは無いのじやから一度見解を呈す時はその見  
解が其時の學者の位地じや位地が届かぬからいけぬ  
といはれる忽ち其場で位地の出直しと云ふ事は出來  
る道理のものでは無い夫故其場で參禪のやり直しと  
云ふことは法に於て許さぬので有る  
又禪堂で見ると坐禪中折々下見とか隨坐とかいうて  
暫時坐禪を休息する事が有るが皆それ／＼に規律が  
有て隨坐中といへど場内で喫煙を許さぬといふ位  
なものでも有るが在家の者には規律といふものが無い  
朝も早く出やうと遅く出やうと午後に出やうと勝手

次第隨坐もまた勝手にして煙草も自由に吸へるのじや夫故隨坐といふと坐禪は勿論修行の心まで休息させて仕舞て世間の雑話他人の品評ベチヤ／＼話しを始めるから折角前の坐で撮めて來た腹がだいなし崩れて仕舞ことになる修行運びの爲めには大いに損の立つ話して有るからして隨坐もよし煙草もよいがその隨坐中徒に話しをせぬやうにして心中に公案を拈提しながら休息して居るのじやさうすると其次の坐に早く公案に成れるので有る畢竟隨坐の時は妄想御免の場所のやうに思つて居るから心得が違ふので有

扱又こゝに日用動中の修行に大事な心得が有るそれはといふと銘々固有の仁義忠孝の心に背け無いやうにする事じや仁義忠孝は一切善業の總くゝりて人間生れつきの心の筋目で有る即ち佛心の光明で名をかへて言へば宇宙の眞理じや而しも坐禪の修行は此佛心を磨き出すので有るから此心に蓋がして有ては開く事は出來ぬ折角坐禪で少しづつ磨きかけても日用の上で自儘に妄想を起して精出して蓋をして仕舞のて容易に開ける時節は來ない最も忠孝は人道で有て

坐禪修行には拘はらぬものゝやうに思はれるのじや  
が動中靜中佛心はひとつで其ひとつの佛心に固有す  
る道理で有るから此理に背けぬやうに心掛てゆくのが  
即ち佛心を喚起すの一つの捷徑といふものじや  
夫からまた悟りといふ名目に就て話しが有る世間の  
坐禪をする人が悟りくといふことを茶漬飯でもカ  
ツコムやうに理もなく喋々する者が有るが此悟りと  
いふことは容易に言はれるわけのものでは無い悟り  
といふのは自己の法身を正眞に悟つたのが悟りじや  
一則の公案無字でも隻手でも此法身を悟るに就ての

器械であるから其法身の片端がナラとでも見えれば  
其一則は一時よしとして後の修行で追々確かめてゆ  
くので有る然るに僅か法身の片端をナヨイトでも見  
ると徹底悟つたやうな氣に成て己れは悟つた解つた  
と直に悟りの名をかつぎ出して誇りがに言ひ立るな  
とは甚だ心得違ひなことでは有るあかし法身の片端を  
見たのがまるで悟りで無いといふわけでは無いいつ  
れ悟りの區域の中へ這入たには違ひ無いが法身まる  
取に成ては居らぬのじや楞嚴經理則頓悟乗悟併銷  
事非頓除因次第盡と有て此理と事とが圓成して始

めて悟りの名がつけられるので有る尤も上根の人ならば一超直入如來地というて初心に即ち正覺を成ずるといふ事も有るがそれは上古の歴々の身に有る事で漸々に根機の衰へて來た末世の今日に在ては萬が稀でまるで無いというてもよいくらゐなものじゃ今日通常の人の透關といふのはまづ悟りといふものゝ土臺が出来るのでまだ柱も立つては居らぬので有て築造が出来して住はれる所へは中々ゆかぬのじやしかし土臺はするたに違ひ無いのじやから其場をさして大悟に撰んで省發といふ省發も大悟も理から云へ

ば一つじやけれども學者の身に在ては其扱かひに差別が有る我々如き修行に在ては省發とはいふべし悟りといふ名は遠慮すべきで有る  
又今ひとつ最も大事な心得が有るそれはといふと坐禪修行にかゝつた以上は必ず悟れるきつと出来るに相違無いと疑ひ無く安心してかゝるのじやこゝに始めから決心の付て居る人ならきつと受合て出来るのじや是が精神の作用といふもので精神に出来るだらうか出来ぬだらうかといふ疑ひを持って心を二途にわかつて居ては所詮開けるものでは無い又精神で到底

おれには出来まいと思ふたらきつと出来無い萬劫末  
代悟る事はならぬ又精神がきつと出来ると受合つた  
らきつと出来る決して偽では無い活た話して是が坐  
禪工夫する人の第一番大事な心得で有る  
まだ此外にも心得べき事が有るので有るが今こゝに  
思ひ出さぬからしてまづ是だけの事にして止めて置  
くのじや

坐禪中の境界

坐禪をして居る中に種々な境界が發つて本の志を屈

撓たがされるので有るが其中にも最も一心を擾亂じやうらんするも  
のは妄想まうそうじや此妄想の剛強かうきやうな事は百万の強敵かうてきにも勝  
る所のもので夫故古人も或は醉象さいしやうに譬たとへ四蛇しじやに譬たとへ  
虎狼ころうに譬たとへ馬猿ばえんなどに喩たとへて有て手におねぬ代呂物しろもの  
で有るのじや是を退治たいぢするものは只勇猛心ゆうまうしん有るのみ  
で此勇猛心の強いことは八万四千の煩惱ぼんごう見惑けんごつ思惑しごつの  
勢力せきりきよりも亦百千万倍ひやくせんまんばいつよいので有る是を以て妄想まうそう  
を消滅しょうめつする事は大海だいかいの一泡いちぱうを消し二葉ふたはの小草せうさうを引ぬ  
くよりも易やすいのじや又此勇猛心が羸弱れいじやくなれば妄想に  
勝事かつじは出来ぬ妄想に勝事が出来なければいつ迄までたつ



ても悟る事は出来ぬ是は只其學者が一心の強弱に之れ由るので有て規律方法のよくする所のもので無いので有る

又之に次で睡いといふ境界が起る是皆魔境といふもので妄想も足の痛いも睡いのもみんな魔境じや而かも此睡魔がさして來ると修行心は恍惚として仕舞て公案は有るか無しに成て居て夢と現と紛擾雜亂して五里霧中の境界に成て仕舞ふまだくずつとるらい強魔が有る倦むといふ業ものじや倦とは坐禪にあきが來るので禪坐の數が重つて來るといつか此倦魔が

さして來る此倦魔が襲つて來ると智慧も欲も願心も何もかも挫けて仕舞て精神漸々に退却の法を取て總敗軍と成て仕舞ふ是は容易な敵では無い是を退治する勇猛心ぐるめに痿えて仕舞のであるこゝに於て精神を押立願心を振るひ起す事は中々容易なこと無いのじやがこゝで一心を撓まさずあらゆる強魔を鑿にする事も亦容易で有るのじや只一念の作用で有て亦是一心の強弱にあるので有る

扱又こゝに一種特別の境界が有る修行者の一心堅固にして公案三昧に入て更に餘念の動かざるが如き時

に在て忽然と場中震動して大地震の揺るが如くに見  
 えるやうな事も有る或は目前に二間四方ぐらゐの大  
 穴が有るが如く見えたり或は知らぬ老夫が目の前に  
 坐するが如く見えたり或は金箔の佛が見えたり光明  
 がかゝやくと見たりするやうな希有な境界の現する  
 事がマアめつたには無いがまれには無いともいへぬ  
 のじや萬一こんな境界が現じたからと言って決して驚  
 く事は無いので是亦魔境といふのである畢竟一心の  
 作用で有て不思議な事でもなんでも無いのじや夫故  
 如何なる境界が現じやうとも其現境に取合はず一心

の勇氣を以て工夫精進なるときは忽ち魔境は消散し  
 て仕舞ので有るもとより虚妄なものと承知して取合  
 はぬのが肝要で有るのじや  
 又定力が積んで來ると身の内で脈を打つ音が聞えて  
 來る頭腦の脈から胸部の脈も聞えて來る兩肩で血の  
 往來する音などもわかる又下腹の脈などは波の打や  
 うにドーン／＼と聞える兩足から踵の脈音迄はハツ  
 キリと聞えるやうになる又目の前の線香の灰の音が  
 聞える線香のたつ音などはザリ／＼と聞ゆるその灰の  
 落る音に就ては金の上へ落た時はチヤリと聞ゆる木の

上へ落る時はバタリと音がする灰の上へ落た灰はバ  
サリといふ夫々かはつて判然聞える是皆定力の功驗  
といふものでかやうな境界はさまざま有ることじや  
がかういふ境界を覺ゆる時は心のうちで嬉しいとい  
ふ情が起る此嬉しいのが即魔境といふもので畢竟み  
な妄想じや縦ひ何ほど殊勝な境界が現じやうとも皆  
定力の功績ぞ有てそれが悟りといふものでは無いの  
ぞ有るからいかなる妙境が顯れても少しもそれに取  
合はず坐禪三昧に入て一向一心に進み込で退かぬの  
が即ち修行の眼目で有る

尙此外魔境はさまざま有る事ぞ楞嚴經には五十種の  
魔境が説てある委しく知らうと思ふならば本經につ  
いて見るがよろしいいづれにしても皆妄想の所爲で  
有るから取合ぬのが肝腎要じや

坐禪の用心

用心とは心を用ふるといふ事でいつたい坐禪をする  
のに用心するといふは無い事で坐禪の用心は用心せ  
ぬのが用心じや然るに今時坐禪をする人が皆心を用  
ゐて坐禪をするからとかく埒があかぬのじや

まづ大概坐禪をする人が空にならうくと心を用ゐて居る是が第一間違ひじや空にならうと思つて居るからいつまでもなれぬので譬へばこゝに一碗の飯が有る此飯をどうかして無くさうくと白眼つけて居るうちはいつ迄立てもなくならぬ夫から智慧をもみ出して考へれば考へるほど尙なくならぬまだ無くならぬまだ有ると白眼つけて居るうちいつか日が暮て仕舞のじや所を無くさうとも無くなすまいとも思はず法に従つて箸ではこんで喰て仕舞といつの間にか無くなつて仕舞ふ坐禪も其通り空にならうくと此

身軀を白眼つけて居るといつまで立ても無くならぬ所を法に従つて一則の公案を提撕して三昧に入て見ると空にならうともなるまいとも思はず知らずいつか自身をも忘れて仕舞此忘じた所が空じやと思ふか夫はまだ正眞に忘れて見ない前の分別じや正眞に忘れ切た所は空でも無ければ不空でも無い空とも不空とも成たとも成らぬとも思はぬ所が眞實で假りに號して真空といふいつたい凡夫の了簡では我身を空にして仕舞てその空に成た所を自身で見氣に成て居るのでソユデ自身を自身にらみつけて汲々して居る

ので有て是が心を用ふるといふもので坐禪の見當違ひを行て居るのじや

大惠禪師云若存心在破處則永劫無有破時

と示されて有る又公案三昧に入るにも心を用ふるから三昧にならぬので三昧とはなりきることじや公案の外に別段三昧にならうといふ妄念をかついてまはるから妄我と公案とがいつまでも二つに成て居ていよく成切る事が出来ぬのじやおれがなり切うおれが成切うと思ふ此おれがを抛り出して只公案にさへ成て居ればそれでよいのじや

無字にもせよ隻手にもせよおれが拈提して居ると思ふからいつ迄も一とつになれぬソコデ公案がチヨイゆるむ公案が緩むとすぐに妄想が入れかはる此時また妄想を引こまさうと思ふ此思ふものが即妄想じやから妄想と妄想とで競争して居るので其奥の院におれがといふ妄我が凜然と主位に居るから夫では到底公案になる事は出来ぬ是皆心を用ゐて坐禪するといふものじやソコデ坐中にもし妄想が出たらすぐに州云無とグツと強く煉込のじやさうすると妄想は世話なしに引込で仕舞夫からまた出る出たらすぐに

隻手甚麼聲ぞとグツト煉込始めのうちには公案と妄想  
 と新陳交代して取りとまりの無いやうじやが是を押  
 切てゆくと竟に公案三昧に入ることが出来る是が用  
 心無しの用心といふもので最も大事な用心じや畢竟  
 公案が弱いから間斷かんだんが出来るので公案が緊々と拈提  
 が出来て居れば妄想の爲めに追出される筈は無いの  
 で有る夫からスツバリ三昧に入込で仕舞と寶所在近  
 で遠からずしてお悟りが開けるのじや  
 法然上人の歌に  
 妄念まうねんの發らばおこれと振捨て念佛申すが手にて候

此歌が此無用心むしんの用心によく適當して居るので夫故  
 こゝへ假り用ゐて工夫の便りに供へるのじやマア一  
 つ此通り正直しやうじきにやつて御覽じろきつと御利益ごりやくの有る  
 事で決して偽いつはりでは無いので有る

### 工夫の用心

工夫といふ事は今では多く考への方へ扱つて居るの  
 ぞ有るが坐禪の工夫は考へるといふ意味では無いの  
 でいつたい此字は職人の男しやくにんのおとこといふ字で職人が仕事を  
 して居る所のやうすを言ふたもの例へば大工が斲たく斲たく

などして居る時は一ト手誤れば自身の向ふ臙を斫る事と成るから少しも油断は出来ぬ又火消人足が足場丸太の上をわたる時などは一ト足ふみ外すと眞逆さまに落るわけでは是も少しも油断は出来ぬ此油断の無い所を工夫といふ此意を取て宗門の上に宛て扱ふので即ち假借字で有るのじやされば坐禪修行の工夫といふのは蒲團の上に結跏趺坐して公案を拈提して少しもわき見をせず油断の無い所是を工夫といふソコデ工夫の用心といふのは妄想を出すまいと心を用ゐる事では無い妄想を出すまいと思ふのが早妄想じや

からそんな出さうの出すまいのといふ妄念をふり捨て只一向に公案に成切てゆく是亦用心なしの用心といふもので公案工夫の正眞の捷徑じや然るに今時公案工夫するに就て工夫といふは考へる事と思ひなして蒲團の上で首をかたげて頻りに妄想をくり出して考へて居る人が多いので有るが元來考へて當てる筈のもので無いのじやからと迄考へてもおつつきはせぬ是が即工夫に妄想を用ふるといふので用心の見當違ひ工夫の戸惑ひといふものじやそれでも考へなければ參禪に往て言ことが出来ぬとい

ふで有うがこゝに大事な話しが有るのじやよく聞て  
 貫はねばならぬいつたい公案といふものは畫に描て  
 有るやうなもので識心で考へて當てるのでは無い見  
 て知るので有る見るといふても肉眼で見るとは無  
 い心で見るとのじや只管公案になり切て純一に工夫し  
 て居ると此肉眼で物を見る如くに自ら其公案が心の  
 鏡にチヤンと顯れる其見た通りを師家に呈して其可  
 否を定めて貫う是が參禪といふものじや然るを其公  
 案を照らす本心を妄想で蓋をして置て故らに答へを  
 造つて持出すからソコで眞體に齟齬するので學者が

早く開けないのは全く是が爲めで有るされば工夫の  
 用心は心を用ぬのが正眞の用心で少しでも心を用  
 る所が有たら悉く皆妄想で坐禪工夫の損にこそな  
 れ益にはならぬかういうてもまだ中々承知は出來に  
 くいもの妄想分別を除けて仕舞と便りなく心細く思  
 はれるのであつて是といふのが年來妄想を頼み切て  
 居た悪癖が付て居るからの事又一切の學藝で見ると  
 すべて妄想を肥すのじやから其慣習も一つは有るの  
 じやされども今こゝにいふことは決して偽では無い  
 又方便でも無い眞實正眞の工夫のしかたを全く悟り



の捷徑じや  
是に従へば仕事早い是に背けば埒はあかぬ古人歴々も皆是に寄て行てこられたので我等に於ても實行經驗の上のお話して判證文を張てきつと受合恐らく間違ひ無い事を有る

參禪の用心

參禪とは師家に對して自心の見解を呈するので是に就て用心のしかたが有る  
初心の人で見ると坐禪工夫はして居ながらとかく參

禪に退歩をして師家の前に出得ない人が有る何故かといふとなんだか恥かしいやうな俗にきまりがわるいといふやうなものに障へられて委縮するので有るもとく道を慕へばこそ坐禪もするので有るがサアといふと委縮する最も見解も不慥なものが有るからの事でも有るが見解の立ぬのは骨折のたらぬので只考へて計り居るからの事じや逆もやるなら正眞に骨折て見解を立て參禪に委縮せぬやうたびく參禪すると其工合もわかつて來るのじや  
或はまた一遍で甘い事をいはふといふ名聞心に使役

されて委縮するものも有る  
又はつまら無い答をして笑はれるのが否じやおれく  
らゐな學問が有てまだわからぬかと思はれるも外聞  
がわるいと尻ごみをする  
又參禪をしても出来ない時には氣がきか無いからと  
退歩するものも有るこんな所へ計り心を用ひてわづ  
かな名聞心にかゝつらつて居るのでいつ迄も埒はあ  
かぬ是が含羞がる婦女子の間だに有るかと思ふと今  
時の婦女子は其教育が活潑である故か男子よりは飛  
上つて居て平氣で參禪するものも有るが却て學者社

會に此委縮主義が見えるので有る實は卑怯千萬な話  
しで有るのじやとふで始めから命中するもので無い  
のは當然の事夫をわづかな名聞心の爲めに委縮する  
やうな事で大道の修行が出来るものでは無い漢の韓  
信は漁夫の辱めをも忍ばれたので有る況んや師と頼  
んだ人に對して自心の生熟を見て貫ふのに何の憚る  
所が有うぞ是が一つの用心じや  
又坐禪にはろくに骨も折らずに參禪計りしたがる人  
が有るいつも曖昧な見解を擔つて師家を煩はせるの  
は第一に禮を失して居る縦ひ見解は届いて居らずと

も自心にはモウ是より無いと確乎と見定めた見解を以て呈すのが參禪の用心と云ふもの浮た見解ならば必らず參禪せぬ事じや骨も折らずに參禪計りしたがるのは畢竟法心の冷淡なので法へ對しても勿體ない師家へ對しても不敬で有るかやうな浮薄な修行心なら參禪辨道止めて仕舞がよいすべて法に對し師家に對し苟も無禮の舉動の無いやうに心を用ゐて慎んで事をするのが法を尊とむ志を表するもので有て是亦一つの用心で有る

又參禪する時には平常の人情は少しも交へず自己究

明の一事のみで縦ひ師家に打れやうが蹈れやうが跳倒されやうが一切我身は師家のする所に一任してかゝるのじや  
 以上は參禪に就ての心の用ゐるかたで別に六つ箇しい事でも何んでも無い求法の心が篤ければ自ら出来る事でも有るがまづは初心の人の爲めにいさゝか注意して置くので有る

坐禪の捷徑

扱是から本題の捷徑のお話して有るがいつたい悟り

といふものは因縁と骨折とに由て遅速が有るので有  
て骨折のかへない人はそれが即ち因縁といふもので  
正眞に骨折の出来る人はまづ因縁のよい人といふの  
じや又妄分別ではいけぬといふ理は十分會得せられ  
て有て兎角分別の方へ引倒される是も亦因縁で此因  
縁を一轉する者は一心の勇氣即ち骨折じやされば悟  
りの遅速に就て主とするものはまづは骨折に在るの  
で有る其骨折に就ても志の方針がまがつて居ると徒  
な道を歩行まはる事に成るから向ふへゆきつくのが  
遅くなる方針が眞直なら早くゆきつくので彼妄分別

を頼んで公案を考へあてる氣に成て居るのは方針を  
斜に取るので有て骨ばかりをれて先ゆきが遠くなる  
されども年來頼み切て居る妄分別を推放すのじやか  
らよく思ひ切て決斷心を起してかゝら無いと此  
分別を捨離する事は出来にくいもの夫故何ほと本道  
のお話しをしてあげても何分危く思はれるものじや  
からイヤあれは方便じやとか又は智慧を捨てわかる  
ものかとか勝手に分別をつけてとかく横道のまはり  
遠い方へまがり込む人が多いのじやなれどもいよい  
よ開く時にはどうでも一度本道へ出て而して向ふへ

ゆきつくのじやから始めから其道へ方針を向けてか  
 られば早く向ふへゆきつくのて有る夫には諸々の妄  
 念雜慮を悉く捨て離れて公案三昧に入るのじや縦ひ  
 どれほど正しい道理でも心法修行の上には皆妄想塵  
 ほこりて有るからナヨイトでも念が動いたらすぐに  
 公案を打消すのじや  
 臨濟大師が逢佛殺佛逢祖殺祖乃至殺盡始得解脱  
 脱と示されたのも即ち此事じや州云無々々と只一  
 向に拈提してゆくと暫く妄想の治まる時が有るスル  
 トこれが公案に成切れたのじやなどいふ思ひが出る

それが即妄想じやからそんな念が發つたらすぐに州  
 云無と打消してゆくスルト亦公案に成る此時また思  
 ふ公案には成切たが是ばかりでどうして開けるので  
 有うとナヨイト出る是は悟りを考へつけたくなる妄  
 念で有る又すぐに州云無と打消すのじや如斯念々の  
 浮むごとに公案で打消々々してゆくと終に正眞に三  
 昧に入て天地一枚になつて而かも天地一枚といふ念  
 も動かぬやうになるソユデスツバリ我身が亡くなつ  
 て亡くなつたとも思はぬ所へ出る是を打上一片の位  
 といふ此打上一片の所へ出ると早こゝが悟りの場じ

やと思ふ是亦妄念じやまだく其所が悟りの場所では無い此打上一片の地位を喩へて見ると厚い氷の中に閉つけられて居るやうなものじや上下四方前後左右悉く澄徹ていかにも見ごとく美しくしいものでは有るけれども我身は氷にとちられて居る故身動きをする事のならぬやうなもの此時に至つて少しも退却の心を發さず一念をも動さず只一向に州云無々々々で無二無三に押込でゆくと頓て時節到來して豁然として眞の悟りが開けるので有る是が第一の捷徑じや扱是は捷徑の正則といふもので此通りに間違ひ無い

ことじやが又此正則にあてはまつて仕舞ふわけのものでは無いのじや或は坐禪中に開けるか或は日用繁雑の中で省發するかいつ何時どこで開けるか定まりは無い又十年かゝつて悟る人も有り五年でやる者もあり或は三年一年半年七日で悟る者も有て順序方法には拘らぬもの前にいふた正則を一向に修して居る中打上一片の地まで至らぬうちに忽ち悟る人も有る是は頓中の頓捷徑中のまた捷徑じやあかしいつれにしても目的をつけては開けぬので目的なしに無二無三に行がよいのじや僅か線香一本の間にも悟る人は

悟るので  
 昔し涅槃會上に廣額屠兒といふ人が有た此人は釋尊  
 の説法をたつた一度チヨイと聞た計りで忽ち一心を  
 悟つて屠刀を放下して我は是れ千佛の一人なりとい  
 うて立地に成佛した又永嘉大師といふ人は六祖の一  
 言下に於て悟られたのじやがマア斯ういふ人は萬が  
 稀で末世の今日に在てはまるで無いといつてもよい  
 のであかし昔しも今も佛性にかはりは無いから一人  
 でも二人でも昔し其人が有て見れば明治の今日に在  
 ても理に於て無いとは限れぬ其つもりで行がよいが

是に就ては兎角誤解者が出來てならぬ夫はといふと  
 今世間に靜中の坐禪を方便と輕しめて動中の工夫を  
 實行と認めて居る人が有る是が誤解じや動靜の二境  
 は素より車の兩輪で有てどちらとも缺てよいといふ  
 理は無いのじや然るに先哲の示す所の一方に偏頗し  
 て己れの氣に好む所を取て耽著して仕舞から間違ふ  
 ので有る  
 大惠禪師云但向二十二時中四威儀内一時々提擲舉覺又  
 云須於熾然生滅之中慕地一跳跳出又云廣額屠兒放  
 下屠刀便成佛豈是做靜中工夫來又云正當方寸擾々

時<sup>ト</sup>護<sup>ニ</sup>提<sup>テ</sup>擲<sup>シ</sup>舉<sup>ゲ</sup>覺<sup>ス</sup>看<sup>ミ</sup>維<sup>シ</sup>摩<sup>ス</sup>經<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>捨<sup>テ</sup>道<sup>ヲ</sup>法<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>現<sup>ル</sup>凡<sup>ソ</sup>夫<sup>ノ</sup>事<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>爲<sup>ス</sup>ニ  
 宴<sup>シ</sup>坐<sup>ス</sup>又<sup>チ</sup>曰<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>斷<sup>テ</sup>煩<sup>惱</sup>而<sup>シテ</sup>入<sup>リ</sup>涅槃<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>宴<sup>シ</sup>坐<sup>ス</sup>  
 是<sup>レ</sup>皆<sup>ク</sup>日<sup>常</sup>用<sup>テ</sup>動<sup>中</sup>の修<sup>行</sup>を示<sup>シ</sup>たもので有<sup>テ</sup>更<sup>ニ</sup>靜<sup>中</sup>の  
 坐<sup>禪</sup>を廢<sup>セ</sup>よといふたのでは無<sup>イ</sup>或<sup>ハ</sup>また動<sup>中</sup>の工  
 夫<sup>ノ</sup>靜<sup>中</sup>に勝<sup>ル</sup>事<sup>ハ</sup>百<sup>千</sup>萬<sup>倍</sup>等<sup>ヲ</sup>示<sup>サ</sup>れて有<sup>ル</sup>のは學  
 者<sup>ガ</sup>動<sup>中</sup>の工<sup>夫</sup>の難<sup>事</sup>を示<sup>サ</sup>れたもので是<sup>レ</sup>亦<sup>チ</sup>靜<sup>中</sup>の  
 坐<sup>禪</sup>をせ<sup>ズ</sup>ともよいといふのでは無<sup>イ</sup>而<sup>シテ</sup>圓<sup>覺</sup>の  
 三<sup>觀</sup>を始<sup>メ</sup>一<sup>切</sup>の經<sup>文</sup>祖<sup>錄</sup>に靜<sup>坐</sup>工<sup>夫</sup>を示<sup>シ</sup>て無<sup>イ</sup>  
 ものは一<sup>つ</sup>も無<sup>イ</sup>また傳<sup>燈</sup>相<sup>承</sup>數<sup>千</sup>の先<sup>德</sup>に靜<sup>坐</sup>工<sup>夫</sup>  
 夫<sup>ニ</sup>寄<sup>ラ</sup>ぬ高<sup>僧</sup>は一<sup>人</sup>も無<sup>イ</sup>是<sup>レ</sup>等<sup>ノ</sup>こと<sup>ニ</sup>考<sup>ヘ</sup>も無<sup>イ</sup>

一<sup>方</sup>向<sup>ノ</sup>馬<sup>車</sup>馬<sup>見</sup>識<sup>ヲ</sup>靜<sup>坐</sup>工<sup>夫</sup>を輕<sup>ク</sup>見<sup>ル</sup>のは大  
 なる謬<sup>見</sup>で有<sup>ル</sup>而<sup>シテ</sup>此<sup>點</sup>の誤<sup>解</sup>は文<sup>盲</sup>連<sup>ニ</sup>は妙<sup>ク</sup>  
 學<sup>者</sup>社<sup>會</sup>に多<sup>ク</sup>いので動<sup>も</sup>する<sup>と</sup>廣<sup>額</sup>屠<sup>兒</sup>や永<sup>嘉</sup>大<sup>師</sup>  
 をひ<sup>き</sup>あ<sup>ひ</sup>に出<sup>シ</sup>て靜<sup>中</sup>にま<sup>さ</sup>る百<sup>千</sup>萬<sup>倍</sup>の又<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>  
 上<sup>煉</sup>磨<sup>ノ</sup>とい<sup>ふ</sup>ので有<sup>ル</sup>が其<sup>實</sup>は妄<sup>想</sup>分<sup>別</sup>の考<sup>ヘ</sup>も  
 のに<sup>シ</sup>て居<sup>ル</sup>のじ<sup>や</sup>から是<sup>レ</sup>等<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>事<sup>上</sup>煉<sup>磨</sup>はソ<sup>ツ</sup>  
 クリ<sup>熾</sup>妄<sup>想</sup>の分<sup>別</sup>煉<sup>磨</sup>とい<sup>ふ</sup>もので禪<sup>門</sup>の修<sup>行</sup>に在<sup>リ</sup>  
 ては一<sup>厘</sup>の價<sup>値</sup>も無<sup>イ</sup>のである先<sup>哲</sup>の所<sup>謂</sup>正<sup>眞</sup>の動<sup>中</sup>  
 中<sup>ノ</sup>工<sup>夫</sup>なら靜<sup>中</sup>にま<sup>さ</sup>る百<sup>千</sup>萬<sup>倍</sup>でも有<sup>ラ</sup>けれ<sup>ど</sup>  
 もま<sup>づ</sup>通<sup>常</sup>凡<sup>夫</sup>の修<sup>行</sup>には前<sup>に</sup>い<sup>ふ</sup>た正<sup>則</sup>を履<sup>ン</sup>で



動靜の二境に於て公案三昧に精出してやつてゆくこ  
そどうしても是が一番捷徑じや  
扱又終りに臨んで一言いうて置くことは此悟りの開  
けた以上は師家の證明といふことが最も入用じや凡  
夫自身の見解で見ると銘々我見偏執の迷ひが有るか  
ら自分の思つた所は必ず善とのみ思ふので師家がま  
だくまだくというて呉るのでどうやらかうやら  
正眞の骨が折れるといふもの到底自ら眞偽を辨ずる  
ことは出来にくいのじや夫故おれには解つて居るな  
どといふ瘦我慢の獨りすましはサマリと改良して師

家の證明を仰ぐがよい一度證明して貰うたらもう大  
丈夫占たものじや  
扱かやうに長く饒舌たてた所で見ると我等の身は大  
さう悟りが出来て居る者かと思はれると大ちがひで  
我等の悟りといふものは芥子一粒どころでは無い蚤  
の陰囊八つわりといふまことに小さな悟りでお恥か  
しいので有るけれども扱此味をチヨイとでも舐て見  
ると實に嬉しくてならぬからどうぞ人にも舐させた  
くなるのでさらばとて自分が出来てからというては  
日が暮て仕舞ふから日の暮ぬうちお取次をするの我

等のはほんの喰かけ越た計りのお悟りじや  
古人の詞に

うまいくあんばいよしおまへもひとつおあが  
りましわしが喰かけを

喰かけはあまり無禮と思へども

なんにもなしの味ひのよき

# 坐禪之捷徑 終

明治三十七年十一月四日印刷  
明治三十七年十一月七日發行

定價金拾八錢

著 作 者

川 尻 寶 峯

發 行 者

鹿 鹽 龜 吉

印 刷 者

仁 科 衛

印 刷 所

厚 信 舍



有所權在着

## 發行所

東京市日本橋區  
藥研堀町三十七番地

## すみや書店

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

# 大 賣 捌

東京神田區表神保町	東京	東京堂
東京日本橋區箔屋町	前	川
東京京橋區銀坐四丁目	東	海堂
東京日本橋區住吉町	至	誠堂
東京神田區表神保町	上	田屋
東京本鄉區本鄉四丁目	文	明堂
其他 全國書林		

## すみや書店發賣品目錄

覆刻叢書第壹卷  
佐々木信綱校訂

### 鎌倉右大臣家集

一名金槐和歌集附錄加茂眞淵翁總評

覆刻叢書第貳卷  
佐々木信綱校訂

### 西山家集

久保田米齋  
銅木清方 兩畫伯合作

### 風俗繪はがき

再 袖珍美本  
版 洋裝一冊 定價金四拾錢

再 袖珍美本 定價金廿五錢  
版 洋裝一冊 郵稅 四錢

最上紙刷 定價金五拾錢  
一組十枚 郵稅 貳錢

久保田米齋意匠畫作

# 全捷繪はがき

特製紙刷 定價金廿五錢  
一組六枚 郵税 貳錢

# 俳諧 雑誌 サラシ井

毎月一回 一部郵税共  
十日發行 金 七錢

俳諧を中心として博く文藝に渉る趣味の最も高深なる雑誌なり

故今北洪川禪師著

# 心經捷解

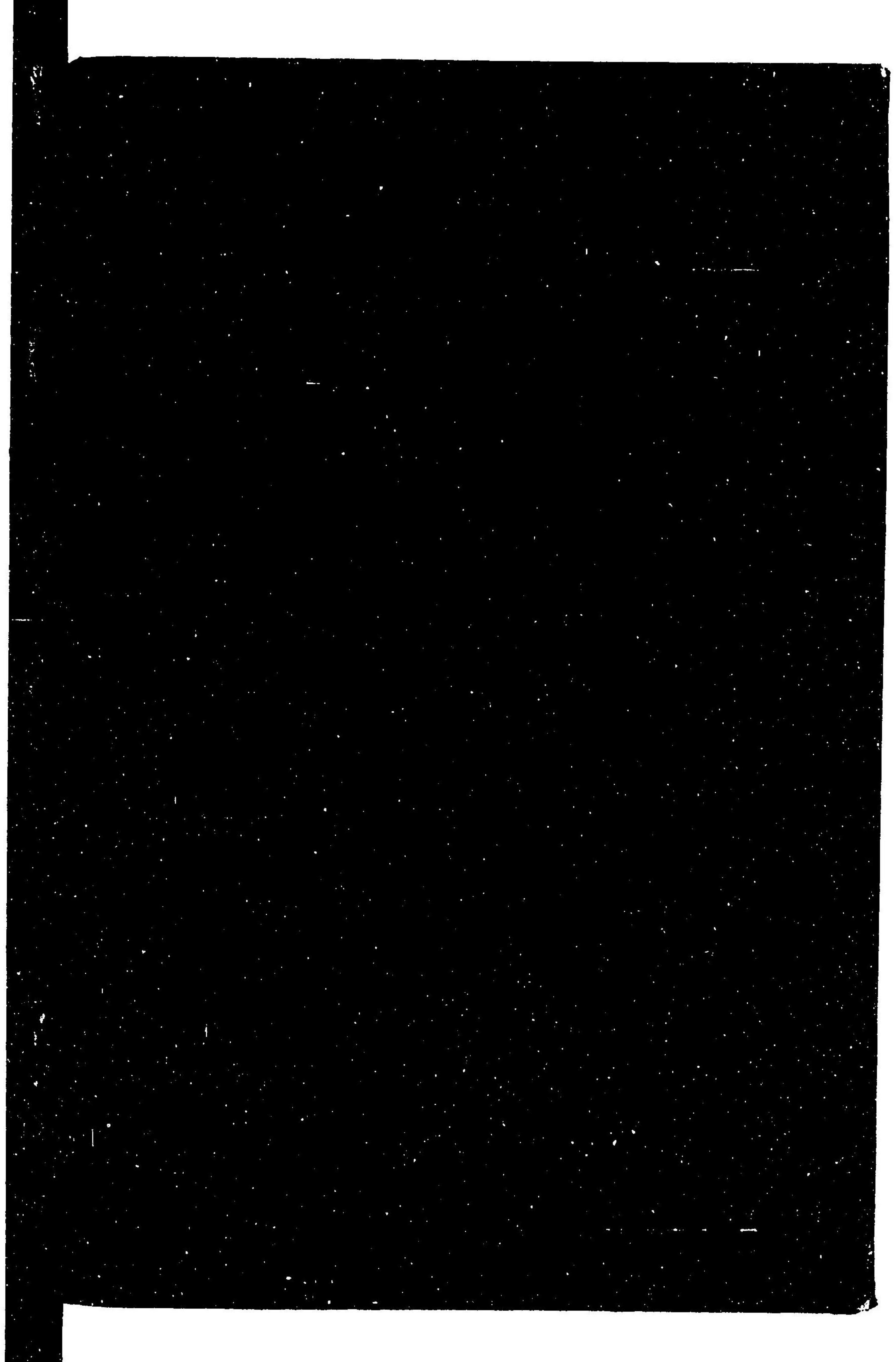
全一冊 近刊  
和装美本 定價未定

古來心經を説く者弘法大師の心經秘鍵東嶺禪師の心經註あるのみ本書は故禪師が心經の大意を摘みて心理一方に註せられたるもの眞に教界の珍書にして且何人と雖も一讀了解し得らるゝ無二の好書なり

著者 書籍類は何れの發行を問はず御注文被下候へば精々勉強御取次仕るべく候

47

917  
233



97

233

019445-000-3

97-233

坐禅之捷径

川尻 宝岑/著

M37.11

ABG-0158



